

第一章 明石の物語 上洛と老夫婦の別れの秋

[第一段 二条東院の完成、明石に上洛を促す]

東の院造りたてて(ひんがしのみんつくりたてて、二条東院が完成して)、花散里と聞こえし(花散里と申し上げた故院女御の妹君を)、移ろはしたまふ(光君は移住させなさいます)。西の対(西の対を宛がい)、渡殿などかけて(渡殿の小部屋に)、*政所(まどころ、管理室や)、家司など(けいしなど、経理室などを)、あるべきさまにし置かせたまふ(必要に応じて設置なさいます)。*この記述について、注は<『集成』は「花散里の支配下に置かれ、東の院全体の家政をつかさどるので、花散里に対する夫人の一人としての重い処遇を物語る」と注す。>とある。故院女御の妹君を奉る政治的配慮は、中宮や朱雀院への手前などから、ある程度は納得できる気もする。

東の対は(ひんがしのたいは)、明石の御方と思しおきてたり(明石の御方のお住まいにと御思い置いていらっしやいました)。北の対は、ことに広く造らせたまひて、*かりにても(行き掛り上のことであっても)、あはれと思して(恋心を抱かれて)、行く末かけて契り(来世の縁を誓って情交を結んで)頼めたまひし(面倒見為さる)人びと集ひ住むべきさまに(女たちを集めて住まわせるように)、隔て隔てしつらはせたまへるしも(いくつもの部屋を設けなさいらっしやつて)、なつかしう見所ありてこまかなる(優しい配慮が細かく施されていました)。*注に<『新大系』は「空蟬、末摘花、五節などをさす。末摘花については蓬生巻に既出」と注す。>とある。蓬生巻での記事に於いては、光君は不遇時代に常陸宮姫を全く見捨てていて、その所為ですっかり荒れ果てた故日立宮家に復帰後ふと立ち寄り、援助を再開して宮邸を修復し、やがては姫を東院に移住させた、とあった。そして、その後は共寝をする事はなかったものの常日頃気には掛けていて、部屋の様子をよく窺っていたと記されていた。その姫の部屋というのが、特に大きく作った北の対屋の幾つかに区切った部屋の一つ、だったようだ。東西に広げるのは限界があるだろうから、北の対屋は南北に孫廂などを設けた造りだった、と考えるべきだろうか。此処の記事でもあまり判然としませんが、蓬生巻のこの部分の記述がいやに分かり難かった事を改めて思い出す。

寝殿は塞げたまはず(正殿は空けて置きなさい)、時々渡りたまふ御住み所にして(御自身が御渡りになる時々の部屋になさつて)、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり(それに相応しい調度類を設置させなさいらっしやいました)。

明石には御消息絶えず(明石の君には度々重ねて)、今はなほ上りたまひぬべきことをばのたまへど(未だに上京なさないことを光君は督促なさいましたが)、女は、なほ、わが身のほどを思ひ知るに、

「こよなくやむごとなき際の人びとだに(この上なく高貴な身分の御婦人方でさえ)、なかなかさてかけ離れぬ御ありさまの(むしろすっかり御見限りなさるでもないというべきほどの殿の御訪問の少なさの)つれなきを見つつ(薄情ぶりを思って)、もの思ひまさりぬべく聞くを(余計に恋心に苦しむと話に聞きますのを)、まして、何ばかりのおぼえなりとてか(まして取るに足りない私などが)、さし出でまじらはむ(そのようなお屋敷に差し出で混じれましょうか)。

この若君の(私などはこの姫娘の)御面伏せに(おんおもてぶせに、面目無さに成るばかりで)、数ならぬ身のほどこそ現はれめ(物の数にも入らない身分こそが目立つだけです)。たまさかに(ごく稀に)*這ひ渡りたまふついでを待つことにて(お渡り下さるちょっとした時を待つ暮らしをして)、人笑へに、はしたなきこと、いかにあらむ(物笑いになる極まり悪さは耐えられません)」「*「這ひ渡る(はひわたる)」はく同じ邸内の屋から屋へ渡り歩く。ふと遣ってくる。近くへ特別な用も無く行く。>と古語辞典にある。まして身分の低い私などは殿の気紛れを待つ他ないのだから、とても他のご婦人方との同居は出来ない、という明石の君の言い方は、決して謙遜ではなく現実なのだろう。

と思ひ乱れても、また、さりとて、かかる所に生ひ出で(姫娘がこのまま斯様な田舎に産まれ育って)、数まへられたまはざらむも(物の数に入れて頂けないと言うのも)、いとあはれなれば(大変に残念なので)、ひたすらにもえ恨み背かず(ただ厭だと拒むだけでは済みません)。親たちも(君の両親もこの娘の葛藤を)、「げに、ことわり(実に尤もな事だ)」と思ひ嘆くに、なかなか、心も尽き果てぬ(結論が付きません)。

[第二段 明石方、大堰の山荘を修理]

昔(そこで以前に)、母君の御祖父(ははぎみのおんおほじ、明石の君の母方の祖父御で)、*中務官と聞こえけるが(なかつかさのみやときこえけるが、中務省長官で居らした親王が)領じ給ひける所(りゃうじたまひけるところ、所領されていた土地にあった別荘が)、*大堰川(おほみがわ)のわたりにありけるを、その御後(そのおんのち)、はかばかしうあひ継ぐ人もなくて(しっかりと管理を引き継ぐ人もなくて)、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて(長年荒れ放題なのを思い出して)、かの時より伝はりて(祖父の代からの家系で)宿守(やどもり、管理人)のやうにてある人を(のように住んでいる者を)呼び取りて語らふ(明石へ呼び寄せて相談します)。 *「中務省」は禁中(内裏)の庶務総括ということらしく、格式と権威は高いが形式を守る静政で実権を執る動政ではないので、その司の長官業務の実態は親王の名誉職だったようだ。中国での役所名は「中書省(ちゅうしょしょう)」とあり、書類の作成や記録や管理が主たる業務かと推測される。また、注にはく醍醐天皇の親王である前中書王兼明親王を準抛とする。>とあり、この例で有名な人といえば「前中書王兼明親王(さきのちゅうしやう、かねあきらしんわう)」がいる、ということのようだ。妙に不親切な注に思えるが。 *「大堰川」は大辞泉にく京都府の桂川の上流の称。>とあり、く桂川の嵐山渡月橋付近から桂橋までの称。船遊びが行われた。[歌枕]>と説明される。今なら如何にも観光名所だが、当時は相当に鄙びた一帯だったのだろうか。

「世の中を今はと思ひ果てて(中央に住む事はもう無いと考え尽きて)、かかる住まひに沈みそめしかども(このような田舎住まいに落ちぶれて馴染んでしまったが)、末の世に(老い先短い今となって)、思ひかけぬこと出で来てなむ、

さらに都の住みか求むるを(改めて都の住処を求める事に成ったが)、にはかにまばゆき人中(急に賑やかな町中では)、いとはしたなく(どうも極まりが悪く)、田舎びにける心地も静かなるまじきを(田舎染みた心持ちも落ち着かないので)、古き所尋ねて(昔の所領にあった別荘はどうだろうか)、となむ思ひ寄る(と思いついた次第だ)。さるべき物は上げ渡さむ(必要な費用は京へ送り届けよう)。修理などして、かたのごと(形を整えて)人住みぬべくは繕ひなされなむや(人が住めるように直してくれないか)」

と言ふ(と明石入道が言う)。預り(管理人は答えます)、

「この年ごろ(この数年と言うもの)、領ずる人もものしたまはず(かの別荘は持ち主も手入れをなさらず)、あやしきやうになりてはべれば(見苦しい状態になっておりますので)、下屋にぞ(しもやにぞ、私は物置ばかりを)繕ひて宿りはべるを(修理して住んでおりますが)、*この春のころより、内の大殿(うちのおほと)の造らせたまふ御堂(みだう、礼拝堂が)近くて、かのわたりなむ(あの辺りと言うものは)、いと気騒がしう(けさわがしう、人の行き来が多く)なりにてはべる(成って来ております)。*「この春のころより」で俄かに大堰と光君の嵯峨野御堂との近さが示され、明石入道の思惑が説明される。「絵合」巻の終章最終段に唐突にこの御堂建立の記述があって、その文意を汲むのには些か戸惑ったものだ。が、こういう話の運びになるのなら、あの終段から当「松風」巻の冒頭が始まれば当巻の色合いが示された書き出しとなって、もう少し分かり易いような気がする。やはり、この巻立ては良く分からない。此処でノートすべき事でもないかも知れないが、序でなので「濡標」巻から当巻までの巻立てについて、筆の運びというか、話者の語り調子というか、とにかく非常に違和感があり、提案めいた雑感を少し記して置く。先ず、この「松風」巻が「絵合」巻の終章最終段から始まっている、と仮定してみる。と、「絵合」巻と「松風」巻には必ずしも連続性は無い。それに、「絵合」巻の絶頂感が物語全体に与える印象さえ違ってくるように見える。いくらかの脱稿は当然に疑われるものの、話の連続性、語り口調の分かり易さ、などからして、「濡標」巻の次は「絵合」巻が妥当だ。次いで、「蓬生」、「関屋」、そして「松風」巻とすべき、ように思えてならない。尤も、「関屋」は「蓬生」の同巻別章立てか、当「松風」巻に含めても良いほどの短編でもある。

いかめしき(荘厳な)御堂ども建てて(御堂を数棟と建立しているので)、多くの人なむ(大勢の人びとが)、造りいとなみはべるめる(造営に携わっているようです)。*静かなる御本意ならば(静かな住居をお望みならば)、それや違ひはべらむ(あそこは違うでしょう)」 *注に<『集成』は「入道の申し入れを警戒して、口実を設けて婉曲にことわろうとする」と注す。>とある。確かに、預かりが入道を警戒しているのは間違い無さそうだが、断ろうとしている、とまでは言えないだろう。入道がいくら受領の身分で、預かりがいくら王家付きでも、使用人が主人筋の意向を拒むというのは、発想自体が成立しない。入道は京人に対して丁寧な言葉遣いをしているだけで、立場も身分も実力も預かりに対しては圧倒的な存在であって、実際には直答が無くても当然なほどの差の開きだろう。此処の記述は、だというのに具申が許されると思上がる預かりの人品の卑しさを表現しつつ、明石入道は光君が嵯峨野に御堂を建てているのを承知の上で古い別荘に目を付けた、という事情を説明する文筆技量と注すべきではなからうか。

「何か(それは何の問題もない)。それも(それも承知の上で)、かの殿の*御蔭に(内大臣の私的な御訪問にも)、*かたかけてと思ふことありて(一方では用立てようと思う所が在っての事だ)。おのづから(そういうわけで)、おひおひに内のことどもは(追々に殿のお迎えに相応しい部屋の飾りつけなどは)してむ(施す心算だ)。まづ、急ぎて大方の事どもを物せよ(おほかたのことどもをものせよ、全体の体裁を整える手配をなさい)」 *この「御蔭(おんかげ)」の「御」は光君に対する謙譲だから、此処の「蔭」は一般名詞の「御蔭(おかげ)」の意味ではない。といって「影(かげ、すがた)」でもなく、「陰日向(かげひなた)」の「蔭」で人目に付くか付かないかという意味での<公私>の<私>であり、<私的な訪問>とは「忍び通い」だから、それをぼかして言っているのだろう。ただでさえ主語省略のおぼろ気な古文で、ぼかし言葉の勘違いで話を作られては、直接その面白さを感じ取るのは難しい。でも、此処は笑い所なのだろう。 *「片掛く」は<片寄せる、頼りにする>と古語辞典にあるが、「御蔭」が<私的な訪問>なのだから此処では<片一方では其の為に供

する>の意なのは明らかだ。しかし、事情を知らない預りには入道の真意は伝わっておらず、単に立派なものを造ろうと言う入道の意向くらいにしか取っていなかったようで、さらに具申が続く。

と言ふ(と入道は言う)。

「みづから領する所にはべらねど(私の所領地ではありませんが)、また知り(とって治め管理して)伝へたまふ人もなければ(御継ぎになる方もいないので)、かごかなるならひにて(ひっそりと当初のままに)、年ごろ隠ろへはべりつるなり(長年隠棲してまいりました)。*御荘の田畠など(みしゃうのたはたなど、御領地の田畑など)いふことの(というものが)、いたづらに荒れはべりしかば(無造作に荒れてしまいますので)、*故民部大輔の君に(こみんぶのたいふのきみに、中務宮家後継でいらした亡き民部省次官様に)申し賜はりて(申し願ひ上げて許されて)、さるべき物などたてまつりてなむ(然るべき貢物をして)、領じ作りはべる(自分の作物を作っています)」*此処の「御荘」についての記事からは、当時の荘園管理一般の不行届きな一面が垣間見えるようにも思える。と同時に、自分の生活を守ろうと必死に事情を訴える預かりの卑しさを、さらに示す台詞であり、またそれだけに裏返しに其を許す入道の、娘と孫を思う親心を説明している表現でもあろうかと思う。 *「民部大輔の君」については、注に<兼明親王の第二子伊行(従四位上東宮学士兼民部大輔)を準拠とする。>とある。とりあえずは中務卿の子で、源伊行(みなもとのこれゆき)という人の事らしいが仔細不明。この人が母御の父君なのかも、不明。「民部省(みんぶしゃう)」は戸籍管理によって租税の基本台帳を押さえた役所らしい。

など(などと預りは)、そのあたりの貯へのことどもを危ふげに思ひて(そうした自分の収入分を失う事を危惧して)、髭がちに*つなしにくき顔を(髭を蓄えた愛敬の無い取っ付き難い顔を)、鼻などうち赤めつつ(鼻を切羽詰ったように態と赤らめながら)、はちぶき言へば(泡を飛ばして訴えれば)、 *「つなしにくし」は語義不明と注釈にも辞書にもある。そこで勝手に解釈すれば、音感からの印象は<取っ付き難い>だし、それで意味も通じる。文法を後付ければ、「つなし」は「連れなす(同行する、親しくする)」の連用形の音便っぽい。 *「はちぶく」は<ふくれ面をして文句を言う>と古語辞典にあるが、此処では<泡しぶきを飛ばし>て必死に訴えた描写と解した方が意味が通る。

「さらに(さらさら)、その田などやうのことは(その田畑などのような事は)、ここに知るまじ(こちらは関知しない)。ただ年ごろのやうに思ひてものせよ(そのまま此処数年来と同じ様に処置すればよい)。*券(けん、荘園の権利証券)などはここになむあれど(などは此処にこのようにあるのだが)、すべて世の中を捨てたる身にて(出家して財産管理から離れて)、年ごろともかくも尋ね知らぬを(長年の事情が分からなかったので)、そのことも今詳しくしたためむ(そうした事柄も改めて細かく定める事にしよう)」 *此処の記述は、入道の実権を具体的に示していて、尚且つ京での手配をこの預かりに任せざるを得ない事情という、娘を思う親心から入道が預かりへの気配りを見せている台詞なのだろう。しかし、さすがに預りも漸く入道の実力に気付いて、態度を改めたような記事へと続く。

など言ふにも(などと言う親切めかした話にも)、大殿のけはひを*かくれば(入道は内大臣の気配を含めるので)、わづらはしくて(預りは下手な具申は命取りかも知れないと最早それ以上は何も口ごたえ出来ず)、その後、物など多く受け取りてなむ(褒美や準備費用の物資を入道から多く受け取って)、急ぎ造りける(急いで別荘の改築に掛かりました)。 *「かくれば」の「れば」は「言ふにも」の「にも」を受けた修辭構文で修辭の中身は「かく」だろうが、「掛く・懸く」は非常に多義で此処では「言う」に対し

てなので<込もる・含む>の意味、と解する。そして、その「れば」を受けて「わづらはしくて」以下は預りが主語となる。入道が「券はここになむ」と言って実権を見せた時点で、今まで預りは入道の「かの殿の御蔭に片掛けて」なる言葉を一般論として<内大臣の御事情にも配慮して>と思っていたが、実際に<内大臣の御忍びの用も考えて>という真意だった事に気付いた、ということなのだろう。ところで、入道は何故に明石に残るのか。入道の本業が念仏修行なら一緒に大堰に行っても良さそうだ。是は女房語りなので収支の表事情に口出ししないようだが、入道の本業は所領の管理であり、具体的には人事と蔵管理だろうが、作付けや土木工事の計画や予算付けもしたかも知れない。その下地を現役の管理官だった受領時代に必死に築いたのだろう。当時は徴税と言っても客観的な数値管理は徹底出来なかっただろうから、基本的に貢物政治だった筈だ。その上で、税収を上げるには、土木工事などの環境整備策を講じて、後は特定者に権限付与で恩を与えつつ、一方ではその特定者複数名に貢物競争をさせるのが効果的だ。ということは、その選ばれた複数者は知恵と労力を尽くして増産を図り、恩顧に報いると同時により有利な条件で権限を与えてくれる上司に付いて、自らの富を蓄える。権限付与と競争こそが最大の景気刺激要因である事は古今東西変わらない。その前提が武力に裏打ちされた社会秩序であることも今に変わらない。肝心なのは何時でも具体策だ。当時の情報網では、入道は現場を離れることは出来なかったのだろう。

[第三段 惟光を大堰に派遣]

かやうに思ひ寄るらむとも(明石方が斯様に思い悩んでいようとも)知りたまはで(光君は御知りなさらずに)、上らむことを物憂がるも(のぼらむことをものうがるも、上京を嫌がっているのを)、心得ず思し(納得なさらさないで)、

「若君の、さて(帝の後になるべき我が姫君がそのまま明石で)*つくづくともものしたまふを(ごく地味に暮らしたさるのでは)、後の世に人の言ひ伝へむ(姫が成人した後で世間の人が育ちの悪さを言い伝えやしないだろうか)、*今一際(いまひときは、更に一層)、人悪ろき疵にや(人聞きの悪い欠点だと)」と思ほすに(と御思いになっていた所に)、*「つくづく」は<よくよく、じっくり、しみじみ>の他に、<特に是という事もなくぼんやりと、ぽつんと>という意味と古語辞典にある。此処の文意だと、<ごく地味に>だろうか。*「今一際」は注に<『集成』は「母の出自が低い上に田舎育ちということなので「今一際」という」と注す。>とある。単に帝の妃を目指すというよりも、姫は皇后になるべき、という周到さか。

造り出でてぞ(入道が大堰川の山荘改修を造営し終えて)、「しかしかの所をなむ思ひ出でたる(嵯峨野の近くに斯様な所領地があったのを思い出しました)」と聞こえさせける(と光君に手紙の使者を立てて報告いたさせました)。

「人に交じらはむことを苦しげにのみは(明石の君が東院へ移り住んで他の女たちと交わろうとするのを心苦しうにして居たのは)、かく思ふなりけり(こういう考えがあったからだったのか)」と心得たまふ(と光君は納得なさいます)。「口惜しからぬ心の用意かな(後悔を避けようとする用心深さである事よ)」と思しなりぬ(と御思いに為りました)。

惟光*朝臣(これみつのあそん)、例の忍ぶる道は(例によって光君の忍び通いについては)、いつとなく(必ず)*いろひ仕うまつる人なれば(関与して世話を焼く者なので)、遣はして(大堰の山荘に派遣して)、さるべきさまに(殿が訪問しやすいように)、ここかしこの用意などせさせたまひけり(準備万端整えさせなさいました)。*「朝臣」は五位以上の廷臣。此処では<ヤツ>くらいの語感だ

ろうが、惟光は五位の蔵人に違いない。相当な高官らしい。*「いろふ」は「彩ふ(彩を加える、手を加える)」から転じて、現代の関西語でいうところの「弄う(いらう)」と同じくいじる、口を出す、関る>の意と成ったらしい。

「あたり、をかしうて(辺り一帯に風情があつて)、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける(明石の海宿に似た造りの荘屋で御座います)」と聞こゆれば(と惟光が報告いたせば)、「さやうの住まひに、よしなからずはありぬべし(情緒の無い筈は無いだらう)」と思す(と光君は御思いに為ります)。

造らせたまふ御堂は、大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり(光君がご建立なさっている礼拝堂は大覚寺の南に当たって、滝見の舎殿の設計などは大覚寺のそれに劣らず優れた寺です)。「造らせたまふ御堂」は注に<源融の別荘であつた栖霞観を後に寺とした栖霞寺、今の清涼寺を準拠とする。>とある。「清涼寺(せいりやうじ)」は<京都市右京区にある浄土宗の寺。山号は五台山。源融(みなもとのとおる)の山荘に始まる棲霞寺(せいかじ)内の釈迦(しゃか)堂に、奄然(ちやうねん)が宋から持ち帰った釈迦像を安置して弟子の盛算が一寺としたもの。嵯峨の釈迦堂。しょうりやうじ。>と大辞泉にある。

これは(こちらの山荘は)、川面に(かはづらに、大堰川に面して)、えもいはぬ(風情豊かな)松蔭に(まつかげに、松林の中に)、何のいたはりもなく(装飾を避けて)建てたる寝殿の事削ぎたる様も(ことそぎたるさまも、質素な佇まいも)、おのづから山里のあはれを見せたり(自然に山里の静けさを漂わせていました)。内のしつらひなどまで思し寄る(内装も質素を旨に配慮なさっていました)。

[第四段 腹心の家来を明石に派遣]

親しき人びと(光君は腹心の家来数名を)、いみじう忍びて下し遣はす(ごく内密に明石に夫人と娘を迎えに派遣なさいます)。「親しき人びと」は、此処の場合のように<腹心の家来ども>の意味にもなるし、文脈によっては<馴染みの女たち>の意味にもなる。家来なら男衆なのだろうか。訳文を見ないと文意が分からなくて、この「親しき人びと」の読み方が自然と分かる感性は私には無い。

逃れがたくて(迎えが来ては明石の君も逃げようも無くて)、今とは思ふに(いよいよ上京の時かと知れば)、年経つる浦を離れなむこと、あはれに(長年暮らした海辺を離れるかと思えば感慨深く)、入道の(熱心に面倒を見てくれて来た父の入道が)心細くて一人止まらむことを思ひ乱れて(様子が分かり難い遠い明石で独り残るだらう事を気掛かりに思つて)、よろづに悲し(何かと悲しい気分になります)。

「すべて、など、かく、心尽くしになりはじめけむ(悩み込みに成り出してしまふような)身にか(廻り合せなのだろうか)」と、露のかからぬたぐひ(いっそ殿の情けを受けずに泣きを見ずに済む普通の女たちが)うらやましくおぼゆ(羨ましい気がします)。

親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても、願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど、*あひ見で(入道は離れて暮らす事に成れば、顔を合わさないで)過ぎさむ(過ごす事になる)いぶせさの堪へがたう悲しければ(不確かさが耐え難く悲しくて)、*注に<入道について語る。>とある。「いとうれしけれど」までは「親たち(両親)」の描写で、「あひ見で」からは父親だ

けの描写、ということらしい。後に「母君も」という記事が有るので、前後の文脈を見れば此処からが入道の描写だと言う注釈の意味が分かるが、如何にも分かり難い主語省略文ではある。なお、「あひ見で」の「あひみ」は「相見る」で「見合う、情交する」と古語辞典にあるが、此処では「実際に顔を見合わせる」の意だろう。「で」は「打消しの助動詞「ず」の連用形に接続助詞「て」が付いた語の音便」と古語辞典にあり、意味は「～ないで」とある。

夜昼思ひ*惚れて(一日中呆然として)、同じことをのみ(同じ言を繰り返すばかりで)、「さらば、若君をば見たてまつらでは、はべるべきか(そうなると、今後は孫姫にお目に掛かれずに過ごす事になるのか)」と言ふよりほかのことなし。 *「惚る(ほる)」は「ぼんやりする、放心する」と古語辞典にある。

母君も、いみじうあはれなり(非常に感慨深くありました)。年ごろだに(もう長い間)、同じ庵にも住まず(おなじいほりにもすまず、入道殿と同居せず)かけ離れつれば(疾うに別々の暮らしを立てていた)ので、*まして誰れによりてかは(この上に娘と孫に離れては誰と寄り添って)、かけ留まらむ(敢えて明石に留まろうというものではありません)。 *「まして」について、注は「主語は母君。『集成』は「まして娘が上京する今となつては、誰のためにこの明石に留まろうか。娘とともに上京するのである」と注す。>とある。文意はそれに相違ないかもしれない。ただ此処の文構成に於ける「まして」は、「かけ離れつれば(入道殿とは疾うに別居していた)」「かけ留まらむ(敢えて残留しない)」という「かけ」に「掛けた」主文の妙味に、その因果を修辞として挿入してある味わいなのだろう。その作文意図として言い換えた。

ただ、あだにうち見る人のあさはかなる語らひだに(成り行きで情交した相手との他愛無い寝物語でさえ)、見なれそなれて(親しく馴染めば)、別るるほどは、ただならざるを(別れの心情は、平常心では無いものを)、

まして、もてひがめたる頭つき(好き好んで剃り上げた坊主頭の)、心おきてこそ頼もしげなけれど(世情に逆らう中央志向の意固地さこそ良く理解でき無かったが)、またさるかたに(またそうは言っても)、「これこそは、世を限るべき住みかなれ(此処で骨を埋めよう)」と、あり果てぬ命を限りに思ひて(我が人生の覚悟を決めて)、契り過ぐし来つるを(殿と夫婦の縁を結んで暮らして来たものを)、にはかに行き離れなむも心細し(俄かに遠く離れる事になると言うのも心細いものです)。

若き人びとの(若い女房たちの中の)、いぶせう思ひ沈みつるは(田舎暮らしを憂いて思い沈んでいた者は)、うれしきものから(上京を喜んで居たものの)、見捨てがたき浜のさまを、「または、えしも帰らじかし(もう二度と此処に帰る事は無いだろう)」と、寄する波に添へて、袖濡れがちなり(明石を懐かしみました)。

[第五段 老夫婦、父娘の別れの歌]

秋のころほひなれば、もののあはれ取り重ねたる心地して、その日とある暁に(上京に出立する日の夜明け前に)、秋風涼しくて、虫の音も*取り敢へぬに(とりあへぬに、鳴り止む事が無い中で)、海の方を見出だしてゐたるに(明石の君が海の方を見つめて座していると)、 *「取り敢へぬ」は「折り合う、調和する、間に合う」と古語辞典にある。「取り敢へぬに」の訳文には分意を汲んで「(虫の声も)」

あわただしく鳴く折柄>とあるが、語意に添えば<(虫の声が)収まらない状態で=鳴り止む事が無い中で>なのではないかと思うが、何故こういう言い回しをするのかが分からない。

入道、例の(いつものように)、*後夜(ごや、未明の念仏行の時刻)より深く起きて(ふかうおきて、早く起き出して)、鼻すすりうちして(鼻をすする音を出して)、行なひ*いましたり(修行に身を慎んでいました)。*「後夜」は<六時の一。寅(とら)の刻。夜半から夜明け前のころ。現在の午前4時ごろ。また、その時に行う勤行(ごんぎょう)。夜明け前の勤行。>と大辞泉にある。「六時(ろくじ)」は<仏教で、一昼夜を晨朝(じんじょう)・日中・日没(にちもつ)・初夜・中夜・後夜(ごや)の六つに分けたもの。この時刻ごとに念仏や読経などの勤行(ごんぎょう)をした。>とある。*「いましたり」については、注にく「います」敬語表現。『完訳』は「例外的な敬語で入道を揶揄」と注す。>とある。確かに「います」の解釈の一つには、「坐す」と表記される<いらっしゃる>なる尊敬語があるらしいが、此处で入道を揶揄する事自体の意味こそが不明だ。むしろ此处での「います」の解釈としては、「忌む・斎む(いむ、身を清め慎む)」の未然形の「いま」に「す(為す)」の連用形「し」が付いたものとして、<身を慎む行いをして>の意味に取った方が筋が良い。なぜなら「いまし=忌む+為」でなければ、次の文の「忌すれど(いみすれど、慎んでいたが)」の言い回しが洒落言葉にならないからである。

いみじう*言忌すれど(別れの言葉は殊更に避けていたが)、誰も誰もいとしのびがたし(誰もが皆とても悲しみを抑え切れませんでした)。*古語辞典には「言忌み(こといみ)」を<不吉な言葉を避ける事>を意味する語、という説明がある。そういう語や語法はあるのだろうが、此处の文では「いみじう言(厭な言葉=別れ言葉)」を「忌すれど(避けていたが)」という通常の用法、と解しなければ意味が通らない。

若君は、いともいともうつくしげに、*夜光りけむ玉の心地して(夜に光ったとか言う玉の様に雛には希な美しい孫に神通力を願って)、袖よりほかに放ちきこえざりつるを(入道は袖の外にさえ出さずに厚く庇護申し上げて来たものを)、*「夜光りけむ玉」とは何か。例えにしては唐突な斯かる思わせぶりな言葉が用いられているにも関わらず、注釈が無いのは意外であり、実際に解釈に苦労する。文意自体は、「夜光る」は<暗闇で輝く→田舎で目立つ>であり、「玉」は<美しいもの>だろうが、名は体を現すのだから、とても一般的な修辞とは言えない「夜光りけむ玉」という言い方に姫君の特性の底意が語られていることも確実である。しかし、ざっとWeb検索しても「夜光りけむ玉」の性質を明瞭に説明するサイトが見つからない。中国の昔話に竜が口に啜えた玉が「夜光珠」だったとか、それが真珠らしいとか、または海竜王との因縁を窺がわせる記事も散見したが、直接この姫の特性を説明できる記事は得られていない。ただ、まあ体感できる夜光現象なら、夜の海を青く光らせる夜光虫の美しいと言うか不気味と言うか、幻想的な神秘性に霊力を想像できなくも無い。で、其の様に言い換えて置く。

見馴れてまつはしたまへる心ざまなど(姫君のなついてまわりつきなきる御心持ちが)、ゆゆしきまで(畏れ多いほど)、かく(自分のこのような)、人に違へる身を(俗世を嫌う入道姿を)いまいまく思ひながら(慎むべきものと思ひながら)、「片時見たてまつらでは(片時も拝見できなくなれば)、いかでか過ぐさむとすらむ(この先どうすれば良いのだろう)」と、つつみあへず(狼狽を隠しきれません)。

「行く先をはるかに祈る別れ路に、堪へぬは老いの涙なりけり (和歌 18-01)

「行く先長くと見送って、老い先短い我が身知る (意識 18-01)

*注に<入道の歌。姫君の将来と一行の旅路の安全を祈る歌。『集成』は「堪へぬ」と校訂。『完訳』は「絶えぬ」のまま、「「絶えぬ」「堪へぬ」の掛詞」と注す。>とある。「はるかに」は<遠く隔たるように>だが此処では遠く離れたい筈は無いから、<いつまでも元気で><手が届かない所まで出世して>欲しいと「祈る」のだろう。その「はるか」に対する「たへぬ」なのだから、<自分はそう長くは無い>から<姫の出世を見届ける事は出来ない>と思えば<つい堪えようも無く流れる>「老いの涙」というわけで、掛詞とは言え「堪へぬ」の方が筋が良さそうだ。

いとも*ゆゆしや(些か未練も過ぎるか) *「ゆゆし」は古語辞典によると、<神聖で畏れ多い>または<不吉で穢らわしい>事を示すのが原義で、<慎むべきという認識>に展開したらしい。この語は原義で使われる場合もあるが、より多くは<慎むべきという認識>に基いて対象の程度が<限度を越える=甚だしい>という意味で用いられる、ともある。その場合の対象主語は文意を汲んで言い換えるしかなさそう。また、「いとゆゆし」の「いと」は強意で<些か>としたが、「(いと)も(ゆゆし)や」の「も」「や」の構文こそが文意で、<強い反語文>か<軽い疑問文>かと言えば、事態の推移自体は入道の中央志向に沿っているのだから<反感>は有り得ず、自分の歌に対する付語であれば、その推移による展開上の別れを<諦観>した上での情に於ける<軽い疑問文>と考える。

とて(と言って入道は)、おしのごひ隠す(涙を押し拭って隠します)。*尼君(尼僧になっていた母君は)、 *注に<明石の君の母君。初めて「尼君」と呼称され、出家していたことが知らされる。>とある。

「もろともに都は出で来このたびや、ひとり野中の道に惑はむ」(和歌 18-02)

「ともに都を出て今は、ひとり野道に迷います」(意識 18-02)

*注に<尼君の歌。「古る道に我や惑はむいにしへの野中の草は茂りあひにけり」(拾遺集物名、三七五、藤原輔相)を踏まえる。「この旅」と「この度」との掛詞。老夫との過去を回顧し別れを惜しむ歌。>とある。

とて、泣きたまふさま、いとことわりなり。

*ここら契り交はして積もりぬる年月のほどを思へば(長年この明石で来世の縁を結んで来て骨を埋めるつもりで居た覚悟の程を思えば)、かう浮きたることを頼みて(このような時流の事情を頼りにして)、捨てし世に帰るも(一度は捨ててきた都の暮らしに還俗して戻ると言うのも)、思へばはかなしや(考えてみれば移ろい易い世の習いです)。 *この一節の言い換えは、我ながら言葉を弄し過ぎる嫌いがあるようにも思うが、この文が相当に含蓄のある言い回しという心象は拭えない。特に「契り」と「世」の語は仏教的背景を色濃く滲ませているので、「世」が<都>を示す事は既に何度も見てきたし此処でも実際に京へ帰るのだから当然その意は汲めるが、「捨てし世に帰る」は平易に見て<還俗>を意味するだろう。にも関わらず訳文がこの複意を敢えて避けるのは、後述に母御が依然として尼君たる記事のあるを推測されるが、入道の許を去る立場の説明としては<還俗>は筋が良いので、敢えて私はこう言い換えておく。また、「浮きたること」については、その語感には<降って湧いたような思いがけなく浮き上がった事柄>が在って、如何にも光君の俄かの栄達を頼って上京する軽はずみを自重すべき意識とも思えるが、それだけに娘と孫が心配で自分も付いて行くことの「はかなし」を言い訳しているようにも感じられる。逆に穿てば、母君は内心で<浮き浮きと>上京を楽しみにしている描写のような語法が、この「浮きたる」にはありそう。そう思えば、「かう」もまた生きる。

*御方(おんかた、奥方は)、 *注に<『完訳』は「源氏の妻妾の一人と確認されたが、終生、「上」の尊称では呼ばれることがなかった」と注す。>とある。いずれ遂に、明石の君の表舞台への登場ではあろう。

「いきてまたあひ見むことをいつとてか、限りも知らぬ世をば頼まむ (和歌 18-03)

「また会える日を楽しみに、どうか長生きしてください (意識 18-03)

*注に<明石の君の歌。「行き」「生き」の掛詞。再会を期しがたい父との離別を惜しむ歌。>とある。やっと韻数を揃えた挨拶だが、真情の表意としては十分だろう。歳の所為か意外に泣ける。

*送りにだに(せめて京まで送ってだけでもしてください) *注に<歌に添えた言葉。父入道に対して、せめて都まで見送りに来てほしいと懇願する。当時の見送りは、目的地まで同道した。>とある。しかし、入信した入道が俗世の習いに従う事は出来ない。そして入道は絶対に還俗できない。なぜなら、娘の中央出世の願懸けに入信したからである。

と切にのたまへど(と父に懇願なされたが)、方々につけて(入道は一つ一つ理由を説明して)、えさるまじきよしを言ひつつ(とてもそれは出来ないと論しながらも)、さすがに道のほども(さすがに一行の道中を思えば)、いと*うしろめたなきけしきなり(たいそう心配になる一行の旅姿でした)。 *「うしろめたなき」については、注に<「なし」は状態を表す接尾語。「うしろめたし」と意味は同じ。>とある。「なき」は「無き」では<なき>もの、とのこと。

[第六段 明石入道の別離の詞]

「世の中を捨てはじめしに(中央政界での出世を思い切ってから)、かかる人の国に*思ひ下りはべりしことども(このような地方官に下る事について色々考えた中で)、 *「思ひ下り侍りし事ども」は<決心して下って来てからの事柄>ではなく、後述文からの逆推で「下るを思ひ侍りし事ども」の文体上の言い回しと解する。

ただ君の御ためと(ただ子である貴方の御成育に)、思ふやうに明け暮れの御かしづきも(不足無い品々で日々お世話する分には)心になふやうもやと(十分できるだろうと)、思ひたまへ立ちしかど(考え至り決心して赴任したものの)、

身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば(着任してみれば地方官の身分の低さに惨めさを思い知らせれる事が多かったのですが)、さらに(かと言って更に)、都に帰りて(都に帰ったとして)、

古受領の(ふるずりやう、年老いた受領上がり)沈めるたぐひにて(目立たない在り来たりの者として)、貧しき家の蓬葎(よもぎむぐら、雑草茂る荒れ放題を)、元のありさま改むることもなきものから(手入れ改修する事もない情けない暮らしぶりを晒す事から)、公私に(同僚や縁者の中に)、をこがましき名を広めて(無能者との名を広められて)、親の御なき影を恥づかしめむことのいみじさになむ(亡き親の名誉を汚すのは憚られましたので)、

やがて*世を捨てつる(とうとう出家いたし)門出なりけりと人にも知られにしを(京を出るのが本当に世を捨てる門出だったのだと世間にも知られましたが)、その方につけては(出家した事については)、よう思ひ放ちてけりと思ひはべるに(よく思い切ったものだと思っていました)、

*「世を捨つ」は<出家する>と<京を出る>の複意で「門出(かどで、境界線を越える)」に掛かる掛詞で、つまり冗句である。此处で笑わないと他に笑う所が無い、みたいな明るいノリかと思えるので、入道の送辞の基調は決して深刻では無いだろう。

君のやうやう大人びたまひ(貴方が次第に成長なさって)、もの思ほし知るべきに添へては(物心付くに従って)、など(私は何でまた)、かう口惜しき*世界にて(こんな惨めな一地方で)*錦を隠しきこゆらむと(天に翳すべき美しいものを隠し申上げているのだろうか)、*心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに(親心の憂さが晴れずに嘆き続けておりましたが)、*「世界」の「界」は<仕切り>で「世界」は<仕切られた区分=一地方>であり、「全世界」の概念とは異なる。その<一地方>を修辭する「口惜しき」は中央に対する劣等感だから、<残念な>よりは<惨めな>。*「錦」は<豪華な織物>だが、<美しいものの例え>に用いられ、富や制覇の象徴でもある。「錦の御旗」は官軍の標だが、天に翳すべき美しいもの、とも言えそうだ。*「心の闇」は注に<「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔)を踏まえた表現。>とある。数度既出の表現。

仏神を頼みきこえて(仏と神を御祀り申して)、さりとも(このように暮らして来てはいても何とか)、かうつたなき身に引かれて(私の低い身分の方に貴方が引き込まれて)、山賤の庵には(やまがつのいほりには、地方官の家に)混じりたまはじ(嫁ぐことがないように)、と思ふ心一つを頼みはべりしに(と思う一心を願ってまいりましたが)、

思ひ寄りがたくて(思いがけずに)、うれしきことどもを(光君との混じり合いという慶び事の数々を)見たてまつりそめても(致し申し出してから)、なかなか身のほどを(かえって自分の身分の低さを)、とごまかうごまに悲しう嘆きはべりつれど(何かにつけて惨めに悲嘆してまいりましたが)、

若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに(姫君がこのようにお生まれあそばした御因縁の確かさをおもえば)、かかる渚に月日を過ぐしたまはむも(姫君がこの寂れた明石の浜に月日をお過ごしなさるのは)、いとかたじけなう(大変に勿体無く)、契りことにおぼえたまへば(姫と内大臣との御縁は特別なものと思われまので)、見たてまつらざらむ心惑ひは静めがたけれど(お会い申せない無念は隠せませんが)、この身は長く世を捨てし(私は疾うに身を引く)心はべり(覚悟が出来ています)。

君達は、*世を照らしたまふべき光しるければ(貴方たちは中央で世の中を明るく照らしなされる光に違いありませんが)、しばし(ほんの少しの間)、かかる山賤の心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ(私如き田舎者の心を楽しませて下さるくらいの御縁だけはあったということでしょう)。*注に<後に「みづから須弥の山を、右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす」(「若菜上」第十一章二段参照)と語られる。>とある。帝の後になるべき姫の未来についての、入道の予言、ということか。

*天に生まるる人の、あやしき三つの途に帰るらむ一時に(天上界に生まれる人が、その果報の尽きたとき、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に帰るといふその悲しい一時に)思ひなずらへて(この別離を思い準えて)、今日(けふ)、長く別れたてまつりぬ(私は長の別れを申し上げます)。*注に

<『完訳』は「『正法念経』に「果報若シ尽クレバ三悪道ニ還リ随フ」。天上界に生まれる人が、その果報の尽きたとき、地獄・餓鬼・畜生の三悪道に帰る。入道はそれにこの別離をなぞらえ、天上界に生まれる自分の一時の悲しみとあきらめる」と注す。>とある。

命尽きぬと聞こしめすとも(私が死んだと御聞きになっても)、後のこと思し(葬儀や法事に気配りなさって)いとなむな(営む事は為さいますな)。*さらぬ別れに(避けられない人の死別に)、御心動かしたまふな(動じなさいますな)」 *「さらぬ別れ」は連語熟語として<避けられない別れ>で<死別>のこと、と古語辞典にある。

と言ひ放つものから(と入道は娘には言い切りながら)、

「煙ともならむ夕べまで(私は煙になろうという夕べまで)、若君の御ことをなむ(姫君の御多幸を)、六時の勤めにも(毎日六回の念仏勤行に)、なほ心ぎたなく(いつまでも未練がましく)、うち交ぜはべりぬべき(祈り交ぜ込んでしまうだろう)」

とて、これにぞ(ここに至って)、うち*ひそみぬる(とうとう泣き顔になりました)。 *「ひそむ」は<顔をしかめる、口を歪める、泣き顔になる>で、今でも「眉をひそめる」という言い方はする。

[第七段 明石一行の上洛]

御車は(みくるまは、牛車では)、あまた続けむも所狭く(多数連ねるのも道中が窮屈で)、片へつつ分けむもわづらはしとて(少しづつ分けるのも面倒であり)、御供の人びとも、あながちに隠るへ忍ぶれば(出来るだけ目立ちたくないの)、舟にて忍びやかにと定めたり(船で静かに上京する事になりました)。

辰の時に(たつのに、午前八時に)舟出したまふ(出帆なさいます)。*昔の人もあはれと言ひける(昔の歌人も感慨深く詠んだように)浦の朝霧隔たりゆくままに(浦の朝霧の中に島隠れしながら遠ざかって行く一行を見送っては)、いとも悲しくて、入道は、心澄み果つまじく(心静かにしていられずに)、あくがれ眺めぬたり(未練いっぱいずっと海を見ていました)。 *注に<「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ」(古今集羈旅、四〇九、読人しらず)。『集成』は「一行の船を入道が見送る気持をいう」と注す。>とある。

こころ年を経て(長年の明石暮らしを経て)、今さらに帰るも(今さらに京に帰るというのも)、なほ思ひ尽きせず(やはり当地の思い出が尽きる事も無く)、尼君は泣きたまふ。

「かの岸に心寄りにし海人舟の、背きし方に漕ぎ帰るかな」(和歌 18-04)

「彼岸を離れた尼舟は、一体何処へ帰るやら」(意識 18-04)

*注に<尼君の歌。「岸」に彼岸と明石の岸との意を掛け、「海人」と「尼」を掛ける。世捨人が再び都へ帰る感慨を詠む。>とある。洒落言葉の使い方は巧みに思うが、深い情感は伝わってこない。ただ、歌自体の説得力とは別にして、尼君本人は明石に心を寄せた長年の暮らしに、其相応の思い入れはあったことだろう。

御方、

「いくかへり行きかふ秋を過ぐしつつ、浮き木に乗りてわれ帰るらむ」(和歌 18-05)

「幾度も行きつ戻りつ恋心、舟が着くのも波任せ」(意識 18-05)

*注に<明石の君の唱和歌。『完訳』は「「浮き木」は水中の浮木。前途の不安を象徴。「憂き」をひびかす」と注す。「天の川浮き木に乗れる我なれやありしにもあらず世はなりにけり」(俊頼髓脳)。張騫が漢の武帝の命によって、槎に乗って天の川の源を尋ねて帰ったという故事を踏まえた歌で、すでによく知られていた故事。>とある。で、「ありしにもあらず世はなりにけり(昔とはまるで変わった世の中に成っていた)」とは浦島譚にも似た、途方も無い距離感。ただし、「かへる」を<都へ帰る>とするのには同意できない。明石の君は初の都暮らしである。此処にある「かへる」は流木が波に運ばれて<再び波打ち際に打ち上がる>ことだろうから、<岸に着く>くらいの言い換えになると思う。御方は母御と唱和するために「帰る」の語を使ったのだろう。この歌は尼君の歌より数段練れている気がするが、連歌の場合は初句より二句、二句より三句が優れている事が多い、というか、前句が後句の前振りとなるのは必然かも知れない。

思ふ方の風にて(望んだ通りの追い風に乗って)、限りける日違へず*入りたまひぬ(予定していた日を違えずに港にお着きに成りました)。人に見咎められじの心もあれば(内大臣の忍び先ゆえに人目に立たないようにとの配慮もあって)、路のほども*軽らかにしなしたり(山荘への道中移動も手早く済ませました)。*「入り給ひぬ」の地名は不明。淀川上流の山崎だろうか。京から浪速に下る時は山崎から乗船する、という注釈が以前にあった。*「軽らか」は<軽々しい、軽快に、手軽な>などと古語辞典にあるが、具体性が見えない分かり難い表現だ。大編成の重装備を避けたらしいことは窺がえるが、人員も衣類も家財も明石入道家の大半にも当たるであろう其相応の大移動ではあった筈で、そう簡単に済むとも思えない。とりあえず此処の文節は、全体に素早い移動の描写だろうかと考えて、<手早く>としてみた。